



馬耳東風

時まさに神無月、今も用いられる陰暦10月の異称だ。森羅万象に神の発現を認める古代の神観念を表す八百万神が出雲に集まり、諸国の神様は留守になるからだという。したがって出雲地方では神在月というのだそうだ。ところで、手紙の時候の挨拶がいわゆる「公用・私用に使える正式な漢語表現」というのがある。10月だと表現の種類も多く「仲秋の候、清秋の候、秋涼の候、秋雨の候、金風の候、夜長の候、朝寒の候、紅葉の候」など様々で何処の家庭や職場にもある「ぼすたるガイド」にしっかり記されている。見たり聞いたり感じたりした自然の風景をさりげなく、しかも手短に書くのが効果的とされる。日本の手紙文化の実用編である。考えてみるとここ数年、きちんとした手紙を出すのも受け取るのも少なくなっていることに気付いた。仲間との情報交換や仕事上の連絡はほとんどメールで間に合っている。したがって、時候の挨拶抜きで用件のみが要領良く記されてしまう。手紙では一月の睦月から十二月の師走まで見事な異称で風情豊かな自然観や人々の生き様を組み入れて表現したりするが、メールだと言わば実務的で省略してしまう。ある時、往診先で「手紙の時候の挨拶はどんなのがいいんでしょうね」と突然聞かれた。日付も肝心だが、受け取る相手と文章の中身もおおいに関係するし、人柄が出るので熟慮が必要だと答えたものだ。

言葉の伝達手段として文字の効用は無限であり、他人

に用件や思いを書き送る手紙の活用もまた無限である。筆と墨の発明は紙の発明を通して発達し、あの見事な毛筆体という芸術文化へと発展した。筆記用具の進歩とともに、学校教育では書くという書写の国語教育の一步から、自ら表現力を筆に託し豊かな感性と共に文字の力を通して自己を表現する文学や芸術への無限の展開がある。若者たちが墨を擦ることからはじめ、落ち着いた雰囲気でも脇目も振らず思いを込めて般若心経を書写する書道の授業を見せていただいたことがある。勿論のこと、東洋哲学的な大乘仏教の何たるかを聞かされているのだろうが、年齢的にも宗教無縁と思われるような世代が、この集約的な時間を通して心の教育のありようを垣間見た思いがして思わず嬉しさを噛み締めたものだ。獣医界職域では多かれ少なかれ何らかの形で動物慰霊祭が行われているが、ある会場で回向の僧侶が急遽の用向きで不在となった。この時、参列者の一人がやおら立ち上がって般若心経を唱えだした。思いがけず回向が順調に進行できて感激した。かつて一般教養的に習得しておいたのだという。

さて、情報機器の急激な普及で漢字は「書く」から「打つ」時代へと変遷し、常用漢字表は1945字から改定で2136字になるという。情報化時代を漢字施策が後追いついてきた。言葉を取り巻く環境の変化が簡略化へ走り出した今こそ、時代に生きる表意文字として漢字の正しい活用と普及により独自の文化度を高めたいものだ。

(柏)